

[資料]

1985～1986年の札幌市における インフルエンザの流行について

Epidemiological Studies on Influenza in Sapporo, 1985～1986

吉田 靖宏 鈴木 欣哉 塚田 正和 青木 曩
清水 良夫 富所 謙吉 高杉 信男

Yasuhiro Yoshida, Kin-ya Suzuki, Masayori Tsukada,
Minoru Aoki, Yoshio Shimizu, Kenkichi Tomidokoro
and Nobuo Takasugi

1 緒 言

札幌市における今季のインフルエンザ様疾患の集団発生は1985年11月15日、市内南区M中学校で初発があった。流行株は、インフルエンザA香港型であった。11月下旬にはいり、この時期としては、例をみない大流行となったが、1985年内に集団発生は終息し、翌1986年には調査対象施設内での集団発生はみられず、1984～1985年全体としては中程度の流行となった。

2 方 法

2-1 ウイルス分離

患者うがい液を、ふ化鶏卵（9日目）、MDC K細胞に接種し、33℃で培養した。

必要に応じてHEL, HEp-2, Vero, Helaの各細胞も使用した。

また、ウイルス同定には、日本インフルエンザセンター分与のフェレット抗血清を使用した。

2-2 血清学的検査

赤血球凝集抑制（HI）試験は、マイクロタイター法で行なった。

使用した抗原は、日本インフルエンザセンター分与のものを使用した。

3 結 果

3-1 インフルエンザA香港型の流行

札幌市における今季のインフルエンザ様疾患の集団発生は1985年11月15日、市内南区M中学校で初発があった。11月15日～20日までに市内6小中学校に集団発生があった。

インフルエンザ様疾患の集団発生報告は、11月下旬にピークをむかえ、12月中旬には終息した。11月、12月としては、過去10年間で最高の流行となった。例年1月～2月に患者発生のピークを迎えていることから、今季はインフルエンザの大流行が心配されたが、12月下旬以降、調査対象施設内での集団発生はみられなかった。全国的にみても、今季のインフルエンザ様疾患は、12月中旬にピークを迎え、年明け以降の患者発生は過去最低であった¹⁾。

3-2 ウイルス分離及び血清学的検査

1985年11月15日～20日に集団発生があった市内6小中学校生徒44名のうがい液から、ふ化鶏卵及びMDCK細胞によりインフルエンザウイルスの分離を試みたが、インフルエンザウイルスは分離されなかった（表1）。

血清学的検査の結果ペア血清の得られた42名中

表 1 1985年11月のインフルエンザウイルスの分離及び血清学的試験

No.	ウイルス分離	H I 抗体価		
		A/Bangkok/10/83	A/Philippine/2/82	B/USSR/83
1	不 検 出	128 ¹⁾ , 128 ²⁾	256 ¹⁾ , 256 ²⁾	256, 256 ²⁾
2	"	128, 128	16, 256	16, 16
3	"	256, 256	256, 256	512, 512
4	"	256, 256	256, 256	64, 64
5	"	512, 512	1,024, 1,024	256, 256
6	"	128, 128	256, 2,048	512, 512
7	"	128, 128	128, 256	128, 256
8	"	256, 256	2,048, 2,048	128, 128
9	"	256, 256	512, 1,024	256, 256
10	"	16, 16	32, 1,024	128, 128
11	"	1,024, 512	128, 256	256, 256
12	"	64, 64	128, 1,024	64, 64
13	"	128, 128	128, 256	64, 64
14	"	128, 128	256, 512	256, 256
15	"	256, 256	128, 128	64, 128
16	"	512, 512	256, 512	512, 512
17	"	512, 1,024	1,024, $\geq 4,096$	256, 512
18	"	256, 512	128, 512	128, 128
19	"	256, 256	128, 2,048	128, 64
20	"	256, 256	64, 512	128, 128
21	"	512, 512	1,024, 2,048	128, 128
22	"	64, 64	128, 512	128, 128
23	"	512, 512	256, 2,048	256, 256
24	"	256, 256	512, 1,024	128, 128
25	"	512, 256	512, 1,024	512, 256
26	"	256, -	2,048, -	1,024, -
27	"	32, 32	512, 1,024	256, 256
28	"	512, 512	256, 512	128, 128
29	"	512, 512	1,024, 1,024	512, 512
30	"	2,048, 1,024	32, 64	64, 128
31	"	512, 512	1,024, 2,048	512, 512
32	"	- , -	- , -	- , -
33	"	64, 128	256, 512	128, 128
34	"	512, 256	512, 1,024	128, 128
35	"	256, 512	128, 128	256, 256
36	"	1,024, 1,024	512, 512	64, 64
37	"	512, 512	512, 512	256, 256
38	"	512, 512	512, 512	64, 64
39	"	256, 256	1,024, 1,024	256, 256
40	"	512, 512	128, 2,048	256, 256
41	"	256, 256	512, 2,048	128, 256
42	"	512, 512	256, 2,048	256, 256
43	"	128, 128	256, 512	64, 64
44	"	512, 512	512, 2,048	128, 128

14名に明らかな、インフルエンザA香港型の抗体価の上昇がみられた。抗体価の上昇を学校別にみ

ると大きな差があることが注目される(表2)。これによると、抗体価上昇が非常に高率でみられ

表2 学校別インフルエンザA香港型抗体価調査結果

検体採取月日	学 校 名	抗体上昇者/検査数	抗体上昇率(%)
1985 11 15	南 区 M 中	2/6	33.3
11 18	白石区 A 中	2/10	20.0
11 18	東 区 O 中	5/6	83.3
11 20	北 区 S 小	1/9	11.1
11 20	東 区 S 中	0/7	0.0
11. 20	西 区 F 小	4/5	80.0

る学校(東区O中)西区F小)と比較的低率な学校(南区M中,白石区A中,北区S中)がみられ,中には,患者7名にインフルエンザA香港型に対する抗体価上昇がみられない学校(東区S中)もみられた。これらの結果から,今季のインフルエンザ様疾患のうち,インフルエンザA香港型のしめる割合は比較的小さく,インフルエンザウイルス以外のウイルスによる感冒が相当数発生したことが予想された。

4 まとめ

1985~1986年のインフルエンザの流行株はインフルエンザA香港型であった。今季のインフルエンザの流行期は例年になく早く,11月中旬~12月中

旬であった。例年,流行のピークを迎える1月~2月に大流行するのではないかと心配がなされたが,札幌市内においては,年明けからの集団発生は1件もなかった。また市内6小中学校の生徒44名からインフルエンザウイルスを検出することはできなかった。42名の血清学的検査の結果14名に,インフルエンザA香港型の抗体価の上昇がみられた。また学校別に血清学的検査の結果をみると,抗体上昇者の割合に大きな差がみられた。

5 文 献

- 1) 厚生省保健医療局結核難病感染症課感染症対策室 インフルエンザ様疾患発生報告 第16報 (1985)